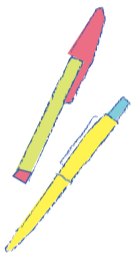


| 生 | を | 見 | つ | め | て |

サバイバー  
からの  
メッセージ若くても危険  
食生活の乱れが  
病の引き金に

山田 太郎さん(丸亀市)



入院中の規則正しい生活で、現在の体重は80kg。毎日の食事はパソコンで記録しているそう。「夕食は家族が届けてくれるけど、朝食は自分で作ります。野菜をゆでて、いつでも食べられるようにしています」

にまひが残り、気管切開や胃ろうの痕が壮絶な闘病生活を物語っています。

を食べたいだけ食べていたと言います。身長171cm、体重は130kg。「今思うと、

山田太郎さん(41歳)が脳出血を患ったのは36歳の時。発症当時、バイト先に出勤しない山田さんを心配し、お父さまが自宅の様子を見に行ってきたところ、倒れている山田さんを見つけたそうです。

急いで救急車を呼び、病院で詳しく調べると、頭の中に3カ所もの出血が見つかり、そのうち手術で血液を取り除けたのは2カ所。今も右半身

山田さんが倒れたのはクリスマス前の直前。翌年の松の内を過ぎた頃によく意識を取り戻し、右手と右足が動かないことを不思議に思ったそうです。それでも治療を続けていけば治ると信じていましたが、現状と今後の見通しを聞かされた時は、大変なショックを受けました。

当時の山田さんは大食漢で1日4〜5食、食べたいもの

脳出血を起こさなくても、あの生活を続けていたら、いずれ大きな病気をしていたと思います」と振り返ります。

現実を受け入れ  
少しずつ前進

今では足に装具を付けて歩けるまでに回復した山田さんですが、リハビリは決して順調ではなかったそう。「右手は動かせず、ただ付いているだけ。どうしても自分の体を受け入れることができなかったから、リハビリにも身が入りませんでした」。日常生活の基本的な動作はもちろんのこと、山田さんには食べ物を飲み込んだり声を出す訓練も必要でした。

最初はベッドの上で動くことができず、二度目の転院でようやく車いすを使えるようになりました。そんな山田さんの転機は、かがわ総合リハビリテーション成人支援施設(高松市)への入所でした。頑張ってリハビリを続けていたある日、施設の仲間と訓練プログラムで初めて小豆島を訪れたそうです。リハビリを兼ねた日帰り旅行でしたが、青空に映える真っ白い風車を見たとき、「障害が残ると、あきらめなければならぬことも多いだろうけど、自分にできる範囲でやってい

うと思いました。ここから何ができるか、何をすべきかと考えることができるようになった」と、初めて前向きな気持ちを持たたと話します。

今できることを  
自分なりの方法で

脳出血の治療後、二度のリハビリ入院を経て、1年6か月を成人支援施設で過ごした山田さんは、昨年9月によく自宅に戻ることができました。一人暮らしを決めたので、退所前には理学療法士が自宅を訪れ、必要な場所に手すりを付けるなど環境も整えました。ドアノブにひもをかけ、中から安全にドアを閉められるようにしたのは山田さんのアイデア。

「一人でいると怠けてしまうから」と笑い、平日は就労継続支援B型事業所で福祉就労に励みます。入浴はヘルパーさんに手伝ってもらいますが、洗濯は毎日、掃除や買い物などは一人で行います。発症後の5年を振り返り、少しずつ夢を持つことができようになったと山田さん。友人にも会いたいし、これからはポッチャやフライングデイスクなどの障害者スポーツにも挑戦したいそうです。